

土岐口西山古窯跡

土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画
整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

住宅都市整備公団

財団法人 岐阜県文化財保護センター



調査区遠景



遺物出土状況

序

土岐市は、全国的にも有名な美濃焼の産地として古くから栄えてきました。その歴史は実に古代までさかのぼり、今回調査が行われた土岐口西山古窯跡もこうした古い窯跡の1つです。

土岐口西山古窯跡は、土岐プラズマ・リサーチパークの造成予定地内に所在するため、我々岐阜県文化財保護センターが調査を行うことになりました。土岐プラズマ・リサーチパークは、国際的水準の研究学園都市を目指し事業が進められている東濃研究学園都市の中核となる地域であり、21世紀に向けた新しい研究への追及が行われる場となる予定です。そして今回の発掘は1000年の時を越えて我我に古代人の生活の一端を伝えてくれました。これもまた21世紀の研究への遺産となるでしょう。

幸いなことに縁地帯として保存される地区に所在したため、古窯跡は滅失を免れることができました。窯本体の構造や全体の様相を知ることはできませんでしたが、こうした大規模な開発の中で遺跡が保存されたこともまた重要なことです。また今回の調査は、土岐市では類例の少ない白瓷の窯跡の発掘調査であり、今後の研究の一助になると思われます。

最後になりましたが、遺跡の発掘調査や遺物の整理・報告書の刊行にあたり、関係者及び関係機関各位のご理解・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 村木光男

例　　言

1. 本書は、土岐市土岐津町土岐口字西山に所在する土岐口西山古窯跡(遺跡番号21212-05314)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画整理事業に伴うものである。住宅都市整備公団より岐阜県教育委員会が委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが調査を実施した。
3. 発掘調査は平成10年度に実施し、長谷川幸志が担当した。
4. 本書に掲載した遺物の実測は次の者が行った。
後藤幸子・小澤真紀子・長谷川幸志
5. 実測図等のトレイスは次の者が行った。
後藤幸子・小澤真紀子
6. 遺物の写真撮影は長谷川幸志が行い、後藤・小澤が補助した。
7. 本書の執筆・編集は長谷川幸志が担当した。
8. 地形測量・航空写真撮影は(株)イビソクに委託して行った。
9. 発掘調査および報告書の作成について次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表する次第である。
荒川孝志・林順一・加藤真司・長瀬未左子・諏訪洋子・中嶋茂・土岐市埋蔵文化財センター
土岐市教育委員会文化振興課(順不同・敬称略)
10. 発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の方々が参加した。
(発掘作業員) 小島銳夫・岡田良三・小出鎮・柄井幸枝・鈴木福子・岡田喜美子
小田原洋子・佐藤学・林茂樹
(整理作業員) 後藤幸子・小澤真紀子
11. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターが保管している。

凡　　例

1. 本報告書では古代の灰釉を施した陶器について、白瓷と統一表記した。
2. 本文中における実測図の縮尺は、層位・遺構が1/40、遺物が1/3を基本としている。
3. 調査区のグリッド名は、南西隅のポイントを用いた。
4. 本文における実測図の模式と各部位の名称¹⁾を第1図に示した。なお反転実測した遺物の灰釉ラインは、実測面の表裏のラインを図示している。
5. 個体数については、口縁部計測法²⁾によるものと底部が1/2以上残る個体を1個体とする方法を併用して計測を行った。
6. 土層の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄 1995『新版標準土色帖』1995年後期版に基づいて行った。
 - 1) 前川要 1984「猿投窯における灰釉陶器生産最終末期の諸様相—瀬戸市百大寺古窯跡出土遺物を中心にして—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』IIIに用いられている部位名称を参考に作図した。
 - 2) 宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集

目 次

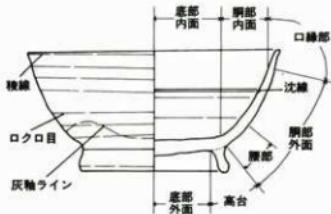
序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3章 調査の成果	9
第1節 層位と構造	9
第2節 出土遺物	10
第4章 まとめ	19
注	
参考文献	
写真図版	



第1図 実測図の模式と各部名称

写真図版目次

図版1 遺構図版(1)	図版3 遺物図版(1)	図版5 遺物図版(3)
図版2 遺構図版(2)	図版4 遺物図版(2)	図版6 遺物図版(4)

挿図目次

第1図 実測図の模式と各部名称	
第2図 調査前の地形とグリッドの配置	2
第3図 土岐口西山古窯の表面採集遺物	4
第4図 遺跡の位置と周辺の地形	5
第5図 調査終了後の地形	6
第6図 B区の層位	7
第7図 B区の土層堆積状況	9
第8図 P1	10
第9図 出土遺物(1)	11
第10図 出土遺物(2)	13
第11図 出土遺物(3)	15
第12図 碗類の法量散布図	19
第13図 盆類の法量散布図	20
第14図 碗皿類の高台径	20

表目次

第1表 出土遺物集計表	16
第2表 遺物観察表(1)	17
第3表 遺物観察表(2)	18

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

本古窯跡は、土岐市土岐津町土岐口字西山に所在する。当地域では、平成5年3月に多極分散型国土形成促進法に基づく振興拠点地域構想として承認を受け、極限環境を基本テーマとする研究施設の集積を図る「東濃研究学園都市」の開発事業が始まった。土岐プラズマ・リサーチパークはその拠点として開発される地域である。

この開発事業に伴い埋蔵文化財が損なわれる可能性があるため、住宅都市整備公団から岐阜県教育委員会文化課に照会があった。土岐市は古くから窯業产地として知られた土地であり、今回開発の行われる丘陵周辺にも多くの古窯跡が存在している。その中で損なわれる可能性があるのは『岐阜県遺跡地図』³⁾に穴弘法3号古窯跡として登録されていた本古窯跡ということが確認された。その後(財)土岐市埋蔵文化財センターの手によって現地確認を行った結果、遺跡推定位置付近から白壺が表採されたため岐阜県教育委員会文化課を通じて当センターが委託を受け、平成10年度に発掘調査を行った。

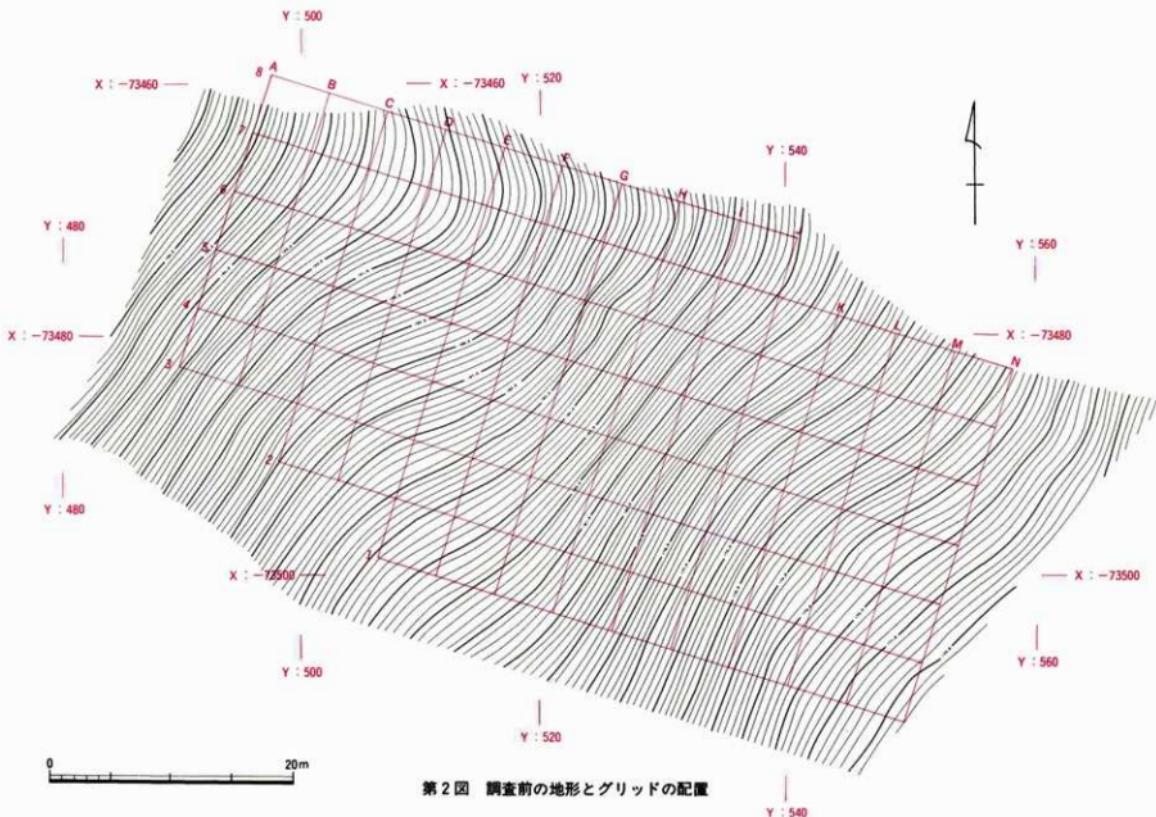
第2節 発掘調査の経過

土岐口西山古窯跡の発掘調査は、平成10年6月15日から8月4日まで行った。古窯跡があると考えられる範囲内に緑地として保存する部分が存在していることが判明したため、緑地帯の南北に調査区を設けて範囲を確認しつつ調査を行うことになった。

グリッドは北側調査区(以後A区)の斜面を基準に任意に設定し、メッシュを5mとした(第4図)。当初は緑地帯が幅広く残されている関係もあって窯体の位置は全く不明であったが、遺物は下部調査区(以後B区)を中心に散布していたため、B区から調査を行った。I4とI5グリッドの表土下約20cmから調査開始直後に灰原が確認された。しかし遺物の広がりがさらに広範にわたることが判明したため、そのまま調査区を広げ斜面の上方から順に掘り下げた。現場はかなりの急斜面であるため足場が悪く、また太い木根をはずすのに手間取り調査が難航したが、約3週間でB区の調査を完了した。その結果灰原の範囲は非常に狭く、緑地帯の中に灰原の大半と窯本体が存在している可能性が高まった。そこでA区の調査は、窯体の上端と附属施設の有無の確認を主眼として行った。

A区は尾根上の傾斜の変換がみられる緩斜面に設定した。何らかの遺構の検出が期待されたが、白壺片を2点検出したにとどまり、窯本体が緑地帯の中に存在していることが確実となった。そのためこの時点で調査を終了し、8月4日に調査を終えた。

その後、報告書作成作業及び出土遺物の整理作業を、当センターにおいて3月末日まで行った。



第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

土岐市は岐阜県の東南部、愛知県との境に位置する。古くから瀬戸市・多治見市・瑞浪市などの周辺地域と共に陶磁器の生産地として知られており、古代から近世にかけての多くの古窯跡が残されている。そして現代においても陶磁器の生産・販売は、土岐市の主要な産業となっている。

土岐市は起伏の多い地形であり、中生層と領家花崗岩類、濃飛流紋岩類からなる山地と、それを覆う新第三紀中新世の瑞浪層群、鮮新世の瀬戸層群からなる丘陵地が市域の大半を占める。市街地は、丘陵地を東から西に流れる土岐川とその支流による沖積地や河岸段丘などの平坦面に形成されている。鮮新世の瀬戸層群は上位の土岐砂礫層と下位の土岐口陶土層に分かれ。土岐砂礫層は瑞浪東部周辺にみられる中生層の岩盤が河川によって削られて堆積した層であり、チャート・花崗岩・濃飛流紋岩等の礫により構成される。土岐口陶土層は数層の粘土層を含む地層であり、植物繊維を含む木節粘土・石英粒を含む蛙目粘土・珪砂・亜炭・礫層からなる。この粘土層は古くから陶磁器の原料として用いられ、大量に採掘がなされている。

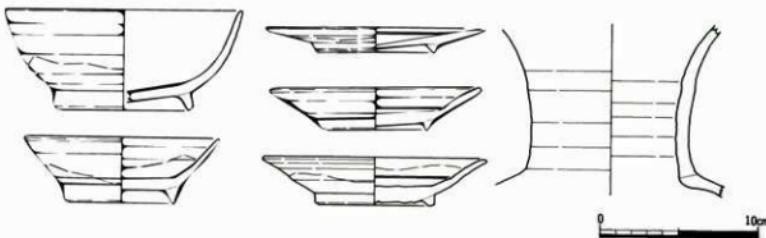
土岐口西山古窯跡は、土岐市と多治見市との境をなす神明峠の南側に広がる丘陵地の北東部に位置する。古窯跡は妻木川の支流である南山川によって開析された洞の南東斜面中腹に立地し、古窯跡下の緩斜面は湧水が形成する湿地帯になっている。古窯付近からは粘土も採取され、水・原材料・燃料などを容易に手に入れることができる窯業を営むのに恵まれた立地条件にあると思われる。今回の発掘によって標高約170~180mの範囲から遺物及び灰原を検出した。

第2節 周辺の遺跡

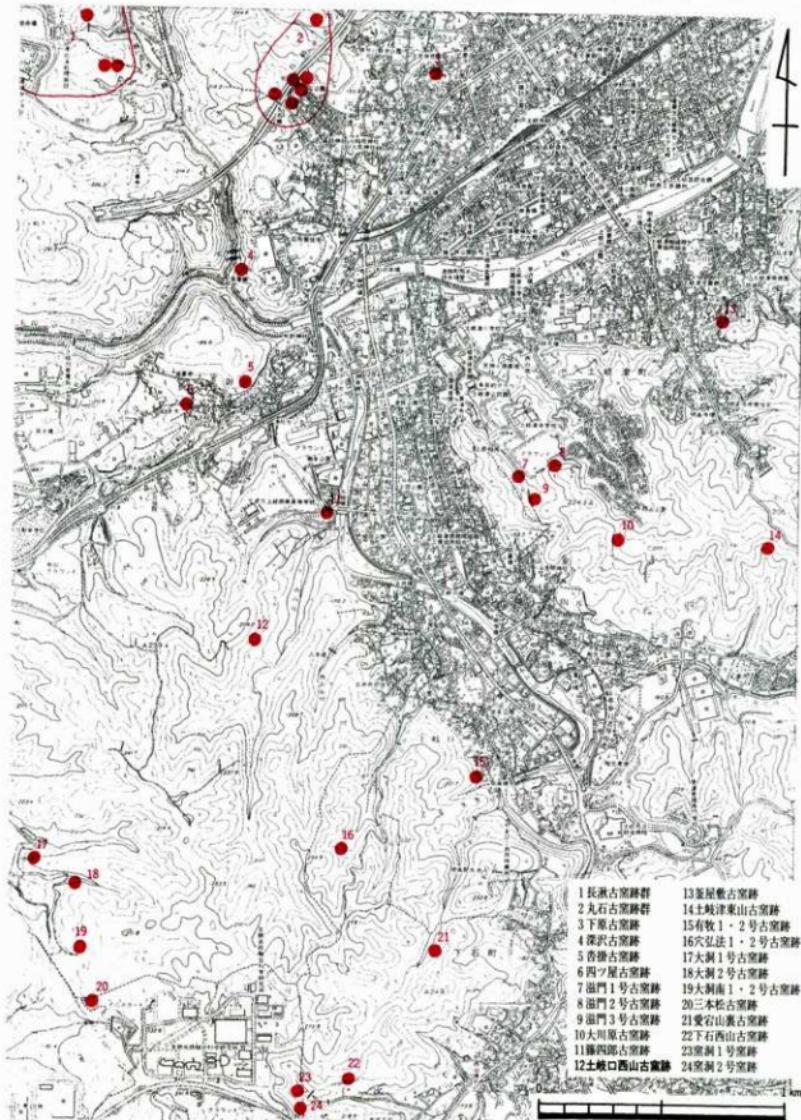
土岐市では古くから窯業が盛んであり、土岐口西山古窯跡周辺でも数多くの古窯跡が知られている。古代では7世紀の須恵器を生産していた隱居須恵器窯・清安寺須恵器窯が知られているが、土岐口西山古窯跡周辺ではこの時期の窯跡は見つかっていない。その他11世紀から14世紀にかけて白瓷や山茶碗を焼成した丸石古窯跡群・長湫古窯跡群が土岐川を挟んで北側の丘陵上に所在している。丸石古窯跡群の中で丸石1・2・4・7号窯跡は白瓷の窯跡であり、1・2号窯については1971年に発掘が行われている。中でも丸石2号窯は、美濃白瓷編年における標準窯の一つとなっている。土岐川より南では、妻木川を挟んで東側の滋門1・2号古窯跡が白瓷の窯跡として知られている。その他同丘陵の南側では大洞北1~3号古窯跡、大洞1・2号古窯跡、大洞南1・2号古窯跡、窯洞1・2号古窯跡などが所在するが、いずれも鎌倉時代の古窯跡である。室町時代以降では穴弘法1・2号古窯跡（古瀬戸系施釉陶器）、有牧1・2号古窯跡（大窯）が同丘陵上に所在するが、生産の主体が土岐川の北に移るため古窯跡数は減少する。

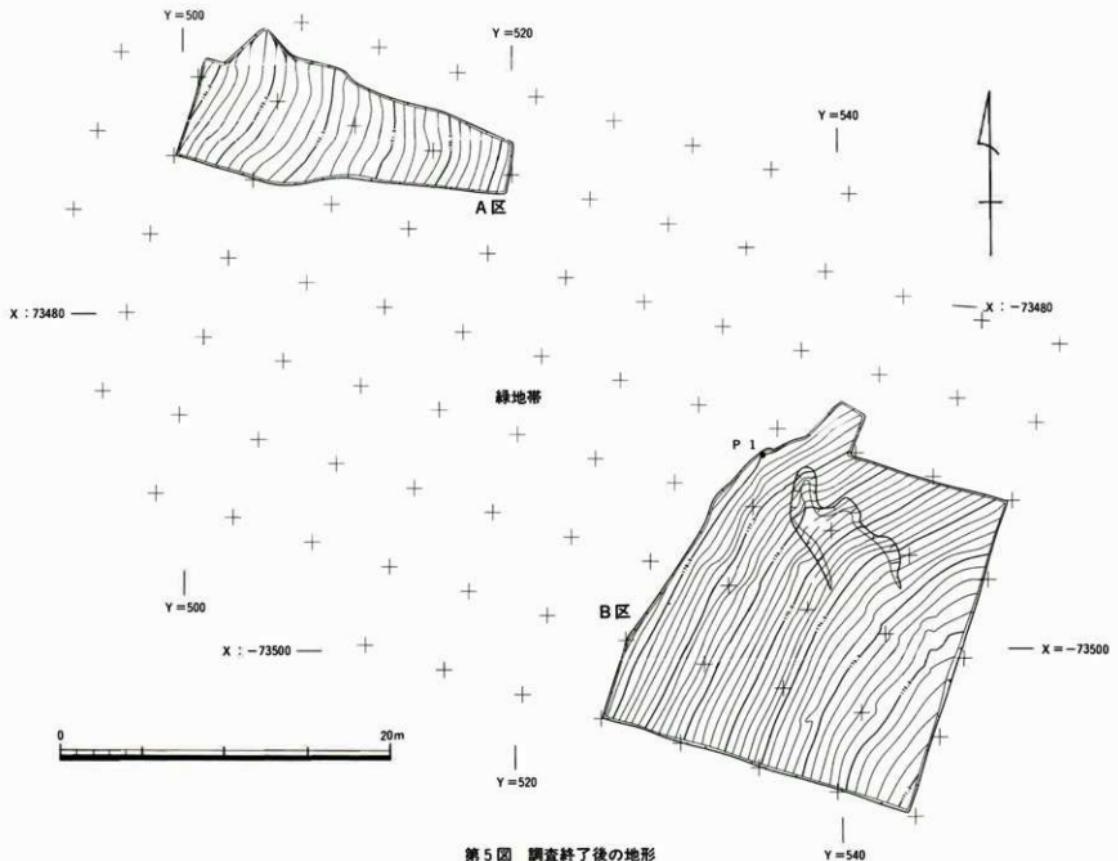
これまでの土岐市の発掘調査は土岐川の北側が中心であり、南側では窯洞1号窯跡（1986年発掘）を除いて調査例がない。また前述の丸石1・2号窯以外で、白瓷を焼成した窯跡の発掘が行われていないため、今回の発掘調査は貴重な事例といえるであろう。

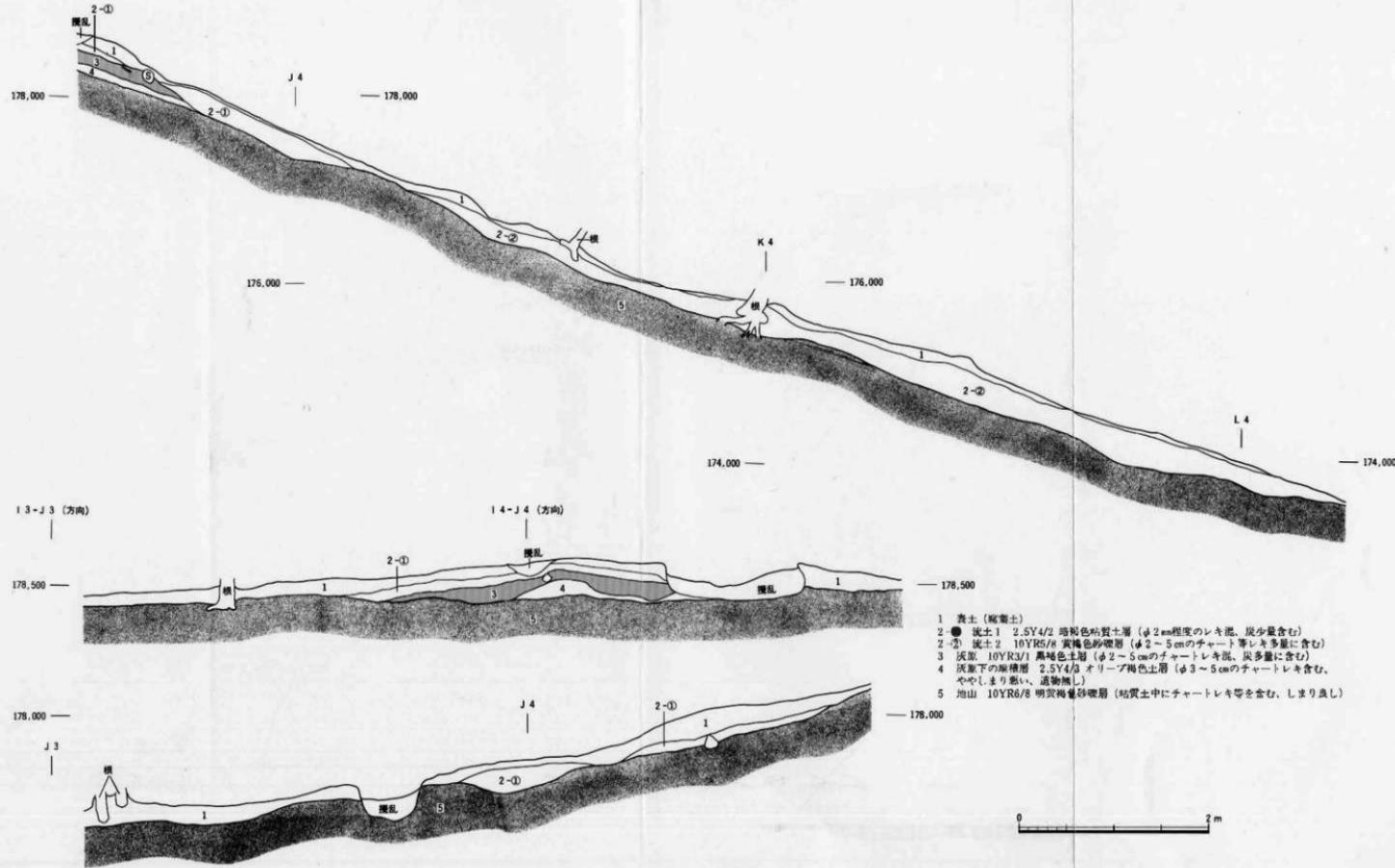
土岐口西山古窯跡は、古くは小屋洞窯址⁹⁾、『美濃の古陶』¹⁰⁾では穴弘法2号窯として紹介されている。この後『改訂版 岐阜県遺跡地図』¹¹⁾を編集するに当たり、踏査によって穴弘法1号窯が2基存在している可能性が高まり、旧来の1号窯を1・2号窯とし、当古窯を穴弘法3号窯とする名称の変更が行われた。しかし『土岐津町誌 上』¹²⁾卷では穴弘法2号窯の名称をそのまま用いているものの、実際には土岐口字小屋洞から南に入った字西山地内に位置している事が指摘されている。また当地域において今後開発が多発することから、遺跡名を整理する必要が生じた。このような状況を鑑みて、土岐市から県文化課へ名称の変更の申請が出され、現在に至っている。



第3図 土岐口西山古窯の表面採集遺物







第3章 調査の成果

第1節 層位と遺構

今回は窯本体の調査を行っていないため、B区から灰原の一部とピットを1基検出したのみである。以下基本層序とあわせて説明する。

A区の層位と遺構

A区は標高188m～194mの付近にある尾根上の緩斜面である。遺物は散布していなかったが、窯本体の上端である煙道部の検出と、周辺と比べ平坦な地形であることから窯に付属する施設の確認を目的として調査を行った。

A区では、表土（1層）の下は礫の混じらない黄褐色の粘質土（2-①層）が覆っている。これは斜面上方からの地山土の流れ込みと考えられる。斜面であるため2-①層の堆積はそれほど厚くなく、斜面下方へ行くと2-①層の堆積はほとんどなくなる。地山はチャートなどの礫を含む土岐砂礫層（5層）である。A区からは遺構は検出できなかったが、窯本体がA区の斜面下にあることが確かめられた。

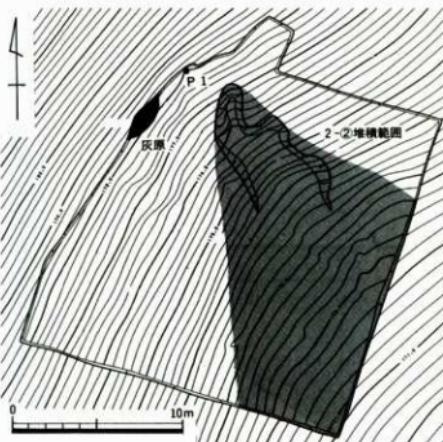
なおA区からは、白瓷の破片が2片出土している。

B区の層位と遺構（第6図、第7図）

B区は緑地帯として残す部分の南東側の斜面下にあたる。標高171～179mであり、遺物はB区から緑地帯の中にかけて広く採集されている。窯本体と灰原が検出される可能性があるため調査区を設定した。

当初の予想では、遺物が最も多く採集されたI3・I4グリッドから窯本体か灰原の中心が検出されるとと思われたが、遺構は検出されず灰原の一部を検出するにとどまった。灰原（3層）は、約1.1×3.1mの範囲で堆積しており、最も厚いところで約20cmを計る。遺物は一定量出土したが、堆積範囲が狭く上地山土が混じり、厚さが薄いことから灰原の縁辺に位置する部分であると思われる。

灰原を2-①層が覆っており、J3・J4グリッドから斜面下方にかけて砂礫層（2-②層）が厚く堆積している。2-②層は土岐砂礫層内に含まれるチャートなどの礫が大半を占めており、遺物は2-②層内からも出土している。



第7図 B区の土層堆積状況

当層は灰層の東南にある沢状に窪んだ部分から調査区の南に向かって広がっており、末端には碗・皿類の底部や瓶類など大形の破片が多くなるが、出土破片数は減少する。

2-①・②層ともに多くの遺物を包含しているが、灰原と標高がほぼ同じで出土のみられないI-1・I-2グリッドなどの地山直上から遺物が若干出土しており、こちらについては何らかの人為的な遺物の移動が行われた可能性がある。またA区から出土した遺物についてはさらにその可能性が高いと思われる。

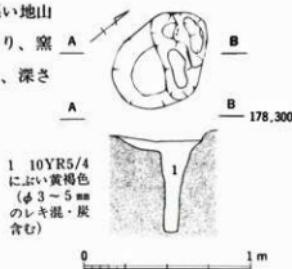
P1 (第8図) B区のI-4グリッドから検出した。埋土はしまりの悪い地山

と同質の土である。遺物 (第9図13など) と炭を最下面まで含んでおり、窯 A

と同時期か直後に掘られたものと考えられる。平面形は楕円形を呈し、深さ

は約1.1mである。

内部の形状が不定型であり、柱穴である可能性は低いと思われる。



第8図 P1

第2節 出土遺物

今回の発掘では窯本体を調査することができなかつたため、遺物のほとんどが灰原または流れ込みによる堆積層からの出土である。そのため層位的な差異による型式差や構成比などの検証を行うことはできなかつた。

遺物は白瓷がほとんどであり、口縁部個体数で150.7個体、底部個体数で227個体、破片数で1656片出土している。器種には碗・皿・瓶・壺などがある。その他では還元焼成された土器師斐、胎土が緻密な須恵器質の瓶がある。また窯道具として焼台が出土しているが、ほとんどが細片であり原形をとどめているものはなかつた。

1・白瓷

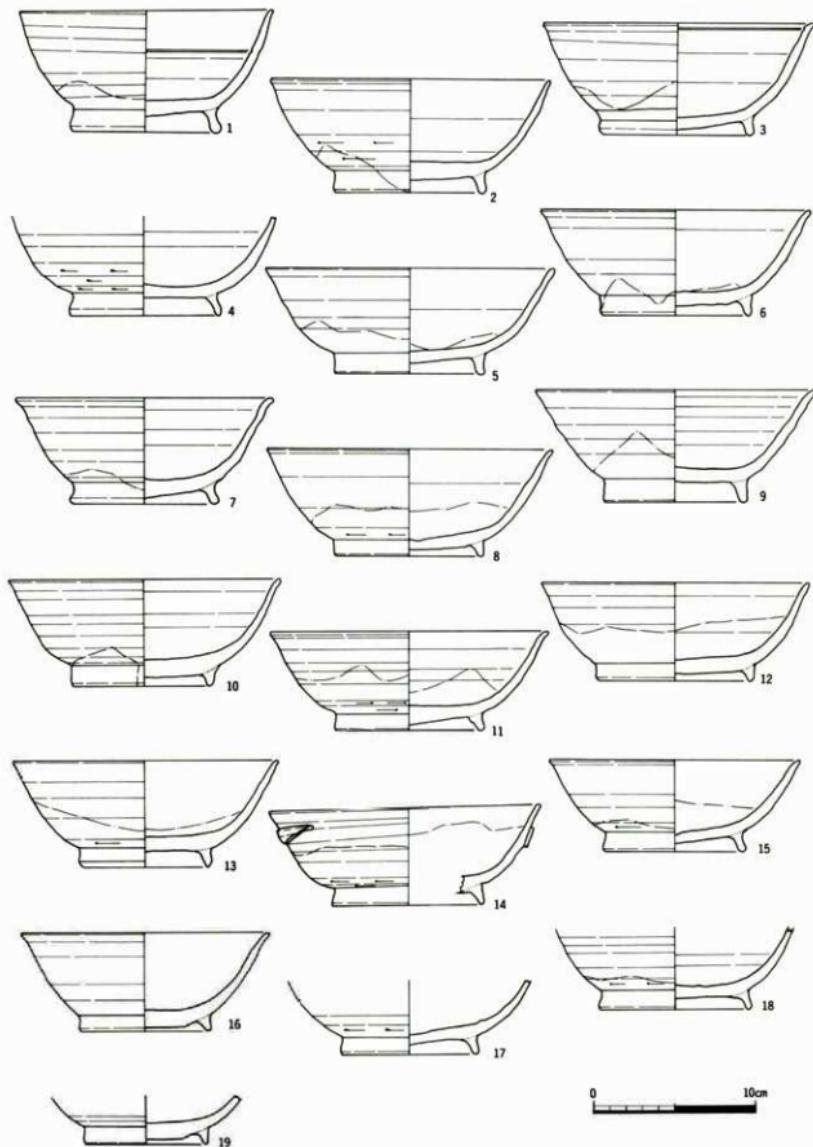
碗類 瓢類は、深碗・碗・小碗の3種に分類できる。

深碗 (第9図1~4) 口径に比べて器高が高く、内面に沈線をもつものを代表として分類した。口縁部個体数で6.8個体 (内面沈線をもつ碗の口縁部破片を含む)、底部個体数で23個体、破片数で142片出土している。法量は口径15.3~16.3cm、器高6.9~7.4cm、底径8.7~8.9cmを計る。

高台は高く厚手のつくりで端部が丸く收まり、若干外に開くもの (1~3) と内湾するもの (4) がある。高台の接着部と腰部外面との境が明瞭でないのも特徴である。腰部の張りが強く丸みをもち、口縁端部は若干外反する。ロクロ水挽き成形で、底部外面から腰部にかけて回転ヘラケズリを施しており、胴部下半にもケズリ痕を残すものがある (2~4)。

灰釉は腰部付近まで漬け掛けにより施される。

碗 (第9図5~19) 碗は本古窯跡において段皿と並ぶ主要生産器種である。深碗に比べて器高が低く、浅碗タイプになっているものを分類した。口縁部個体数で38.4個体、底部個体数で46個体、破片数で698片出土している。法量は口径14.9~17.3cm、器高5.6~6.7cm、底径7.3~9.0cmを計る。高台の



第9図 出土遺物(1)

形状は、外面が垂直に立ち上がり端部を丸く取めるもの（5・8など）、若干外反するもの（7・11など）、内湾するもの（14）、外面に明瞭な棱をもつもの（12・13）等に分類できる。腰部の張りなど器形全体の形状は深碗と大きな違いはないが、高台からはほぼ直線的に開くもの（9）や、腰部の張りが弱いもの（16・19）など特徴的な個体もある。ロクロ水挽き成形で、底部外面から腰部にかけてヘラケズリ調整を施しているが、ケズリ調整を残すものと回転ナデ調整でナデ消すものの2種がある。また17は腰部にはケズリを施しているが、底面には糸切り痕が残り未調整である。このことは、底部器壁が薄いことに起因していると思われる。

16・19はケズリ調整を行わないため底部平坦面が狭く、糸切り痕を残している。そのため高台接着部が腰部付近となり、高台径も小さくなつたと考えられる。このタイプは碗・皿の各種でみられ、低い高台と厚い底部の器壁が特徴であるが、内外面の調整は比較的丁寧に行われている。

灰釉は漬け掛けで行われ、腰部まで深く漬けるものと胴上半部までしか漬けないものの2種がある。
小碗（第10図20～23） 小碗は碗の形態を持つもので、法量が碗より小さいものを一括した。口縁部個体数で4.9個体、底部個体数で12個体、破片数で68片出土している。法量は口径が10.7～11.2cm、器高が3.6～4.4cm、底径が6.0～6.7cmのものがあるが、器形全体が観察できるものが2個体しかないため様相は不明である。

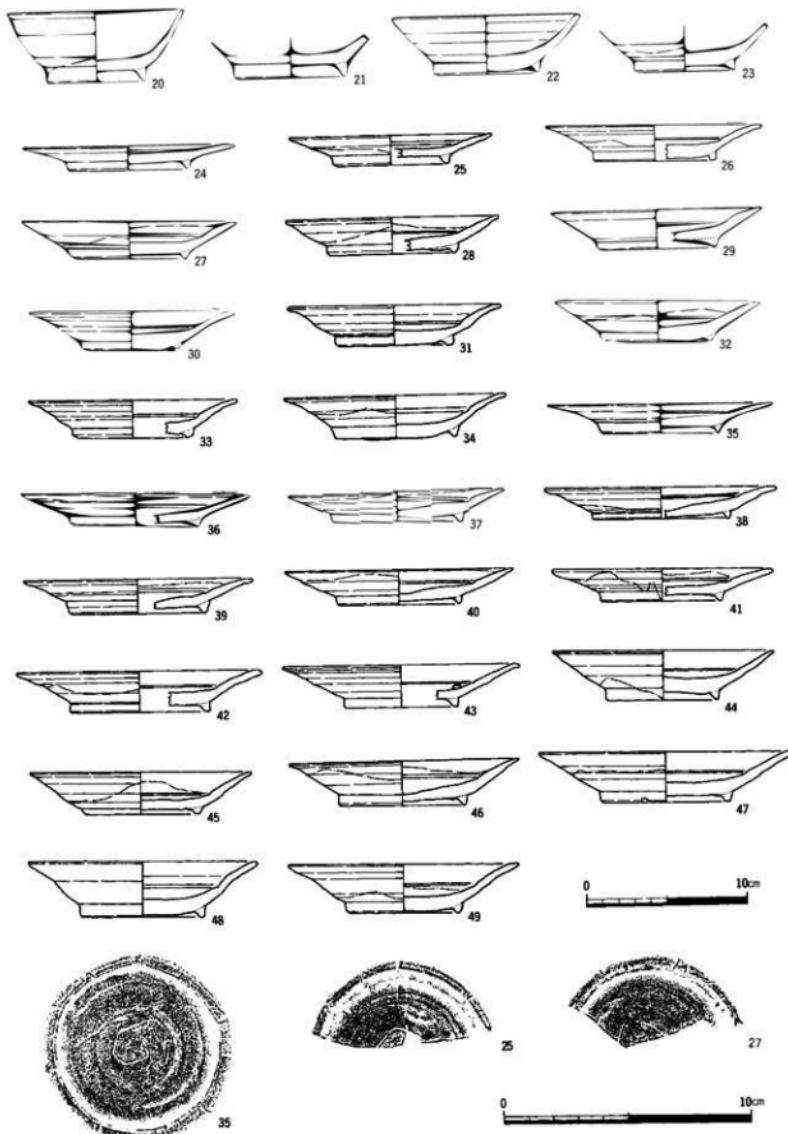
高台が高く胴部の張るもの（20）と高台が外傾し胴部の張りが弱いもの（22）がみられ、その他の破片資料からもこの2種に分けることができそうである（21・23）。前者については碗と同様の形態をとり、底部外面のヘラケズリ調整は行っておらず、糸切り痕が一部残存している。後者は前者より調整が難であり、底部外面に粗穢痕（22）・糸切り痕（23）を明瞭に残し、底部の器壁が厚い。高台は底部外面の外周に付けられ、大きく開いている。

灰釉は外面に漬け掛けされるようであるが、内面全面に自然釉がかかっている個体が多く、判別できないものが多い。

皿類 皿類は段皿・丸皿の2種に分類できる

段皿（第10図24～49） 内面にヘラケズリによって明瞭な段を作り出している皿を分類した。口縁部個体数で84.2個体、底部個体数で107個体、破片数で1182片あり、今回の発掘で最も多く出土した器種である。法量は口径12～15.2cm、器高1.5～3.4cm、底径6.1～8.4cmを計る。口径の小さいもの（24～33）と口径の大きいもの（34～49）があるが、量的には口径が13.0～13.6cm程度の個体が最も量が多い。

形態は、①胴部から口縁部にかけて大きく外反し器高が低いもの（24・35等）、②ほぼ直線的に広がるもの（29・44等）、③腰部に張りをもち口縁部が外反するもの（33・48等）があり、それぞれ法量の大小がある。①は、外面が垂直または内傾、内面が内湾または外傾する細い高台が特徴で、高台接合時の余刺粘土が未調整のまま残されているものが多い。また底部内面中央に凹みのみられるものも存在する（35～39）。ヘラケズリは底部外面に施されるが、糸切り痕が残存するものも多くみられる。②は口縁部が外反するものとしないものがあり、①と比べて器高が高い。高台は端部外面にナデを施して棱をつけるもの（28・29）、端部を面取りし低い逆台形の形態をもつもの（45・47）、端部を丸く取めた三角形に近い形態をとるもの（43・44）などがある。総じて①より丁寧な作りのものが多いが、断面が逆台形の高台を持つものは調整が粗く糸切り痕や高台接合時の余刺粘土を残している。③は底部の器壁が厚く底部外面が未調整であり、糸切り痕を残すものがほとんどである。底部外面の平坦面



第10図 出土遺物(2)

が突出するものが多く、中には高台が接地していないものもみられる（30・34）。高台は腰部外面に付され、逆台形や断面三角形の形態を取る低いものがほとんどである。腰部付近の器壁が非常に厚く、ヘラケズリによって内面を深く削り込むため、段が①・②に比べて明瞭である。全体的に丁寧な調整が施されている。

25・27・35は、底部に線刻文をもつ。底部外面の中心を囲むように、やや角張った渦状の文様を描く。先の尖った工具を用いている。

ロクロ水挽き成形であり、灰釉は口縁部の内外面に漬け掛けにより施される。

丸皿（第11図50～64） 皿の形態をとるもので、内面に段をもたないものを一括した。口縁部個体数で14.7個体、底部個体数で16個体、破片数で166片出土している。法量は口径11.8～13cm、器高1.8～3.0cm、高台径6.4～8.2cmを計る。

形態は胴部から口縁部にかけて直線的に開くもの（50～58）と胴部に丸みをもつもの（59～63）の2種がある。前者は段皿の①・②・③と同じタイプの高台をもつものが存在し、特徴もそれぞれ類似している。また底部内面に一条の沈線をもつもの（51・54）があるが、沈線の直径が碗の高台径の散布範囲内であることから托になる可能性もある。後者は③のタイプの高台（59）をもつものもあるが、端部を丸く收めるやや太めの高台を付す場合が多い。口縁に比べて高台径が大きいのが特徴である。

64は法量が大きく、小碗として分類することも可能であるが、高台の形態が皿に類似するためここに含めた。調整は雄で底部外面に糸切り痕を残し、高台に楔穂痕がみられる。

ロクロ水挽き成形であり、灰釉は口縁部の内外面に漬け掛けで施される。

瓶類・壺類（第11図65～73） 瓶類・壺類は接合率が悪く、器形全体を観察できる資料がないためこれに含まれる破片をすべて一括している。瓶類は破片から広口瓶が存在していると思われる。口縁端部は、垂直に立ち上がるものと端部下が丸みをもつものの2種がある。胴部は胴上半に最大径があり、その部分に明瞭な棱（70）をもつものともたないもの（71）がある。底部は断面が台形になる高台を付す。

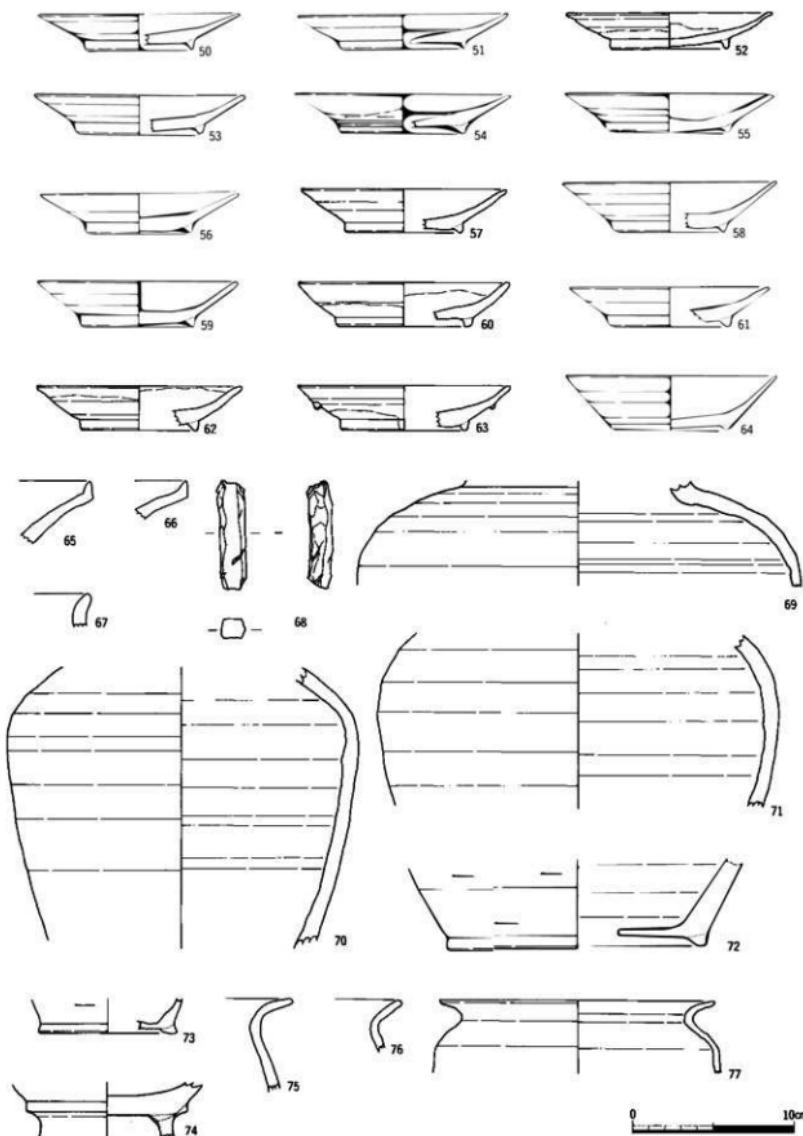
成形は輪積みによって行われ、その後外面を回転ヘラケズリによって調整している。ケズリ痕は回転ナデによってナデ消している。内面はケズリ調整を施すものもあるが、輪積みの隆起を残して回転ナデ調整を行ったのみのものが多い。

68は手付瓶の把手部分と思われる。ねじり合わせた粘土紐の表裏を、糸などの工具で切り取り、面をつけている。口縁部から胴上半に付けられていたと思われる。67は短頸壺の口縁部と思われる。壺と判別できる個体はこの1片のみである。

その他（第11図74） 高坏の坏部と脚部の接合部分と思われる。坏部を成形した後、脚部を粘土を内外面に付加して接着している。坏部下にみられる段は接着時に外面に巡らした粘土を成形して作出している。坏底部は未調整で糸切り痕を残す。

灰釉の有無は不明である。

2. 土師器（第11図75～77） 壺の口縁部と思われる。指頭による調整痕が残る土師器であるが、高温で焼成しており色調が青灰色を呈す。「く」の字形に外反した口縁部をもち、胴上半部が張る器形となる。胎土に石英や雲母などの砂粒を大量に含んでいる。輪積みによって成形しており、内外面を横方向のナデによって調整している。なお底部は出土しなかったため、形状は不明である。



第11図 出土遺物(3)

無釉である。

3. 須恵質土器 (第11図73) 小型の瓶類の底部と思われる。胎土が緻密で色調が青灰色を呈する。形態は白瓷の瓶類と同様であり、外面にヘラケズリ調整を行っている。

灰釉の有無は不明である。

4. 窯道具 窯道具には焼台がある。今回の調査で出土した焼台は細片が多く、図示しなかった。胎土に砂粒を多く含み非常に脆い。一部水平面に高台を置く溝の付けられたものも存在している。

第1表 出土遺物集計表

種別	種別	器種	部位	底部個体数	口縁部個体数	破片数
白瓷	碗類	碗(内面沈線)	口縁部		5.2	87
			半完形	3	1.4	3
			底部	20		52
		碗	半完形	12	3.6	14
			口縁部		34.8	472
			底部	34		212
		小碗	半完形	2	0.5	2
			口縁部		4.4	42
			胸部			2
	皿類	皿	底部	10		22
			胸部			235
		不明皿類	底部			
		皿類総計	胸部			
				71	49.9	1143
	瓶類・壺類	段皿	半完形	40	18.9	96
			口縁部		63.8	718
			胸部			81
			底部	67	1.5	287
		丸皿	半完形	11	3.3	20
			口縁部		11.2	113
			胸部			2
			底部	5	0.2	31
		不明皿類	底部	31		308
		皿類合計			98.9	1656
				154		
	不明破片	手付瓶	把手			1
		短頸壺?	口縁部			1
		広口瓶等	口縁部		1.9	27
			胸部			159
			底部			13
		瓶類・壺類総計		0	1.9	201
	不明破片	底部		2		2
		その他				2523
		不明破片総計		2		2525
	白瓷総計			227	150.7	5525
土師器	甕		口縁部		0.5	6
			胸部			34
須恵質土器	土師器総計			0	0.5	40
	瓶類	底部		1		1
		須恵質土器総計		1	0	1
遺物総計				228	151.2	5566

第2表 遺物観察表(1)

検査番号	遺物番号	器種	残存部位	法量		出土位置	出土層位	口縁 縁高	口縁 底径	口縁 高部 底存	底部 底存	重ね 巻き痕	内面 自然傷	焼成	備考	実
				口径	器高											
9	1	深碗	半完形	15.3	7.4	8.7	I 3	2-①	7.7	0.64	1	有	無	良好	内面沈線	完
9	2	深碗	半完形	16.8	6.9	8.9	I 3	1	0.6	0.05	1	有	無	良好	腰部外面にヘラ削り痕	反
9	3	深碗	半完形	16.3	6.9	8.9	I 3	2-①	9	0.75	1	有	無	やや不良	口縁部内面沈線	完
9	4	深碗?	底部	-	-	9	J 4	2-②	-	-	1	有	無	やや不良	腰部外面にヘラ削り痕	完
9	5	碗	半完形	17.3	6.4	8.8	I 3	2-①	3.6	0.30	1	有	無	良好		反
9	6	碗	半完形	16.1	6.4	8.8	J 4	2-②	1.1	0.09	1	有	無	やや不良		反
9	7	碗	半完形	15.6	6.4	9	J 2-K 2	1	2.5	0.21	1	無	有	良好	腰部外面に隙	反
9	8	碗	半完形	17	6.5	8.8	J 3-J 4	2-①	2.0	0.17	1	無	無	不良	腰部にヘラ削り痕、底部系切り痕	反
9	9	碗	半完形	16.7	6.7	8.9	I 4-J 4	3	2.6	0.22	1	無	有	やや不良	内外面に明瞭なクロ底	反
9	10	碗	半完形	16.4	6.5	8.9	I 3	2-①	6.9	0.58	1	有	無	良好		完
9	11	碗	半完形	16.6	6	8.8	I 3	1	4.9	0.41	1	有	無	やや不良		反
9	12	碗	半完形	15.9	6	9	I 4	3	3.9	0.33	1	有	無	良好	高台外面に縁	反
9	13	碗	半完形	15.9	6.5	7.6	Pit 1		0.7	0.06	1	有	無	良好	高台外面に縁、腰部にヘラ削り痕有り	反
9	14	碗	半完形	16	6.2	9.1	J 4	2-②	5.3	0.44	1	有	無	やや不良	腰部にヘラ削り痕	完
9	15	碗	半完形	15	5.6	8.4	J 4	2-②	2.3	0.19	1	有	無	やや不良	底部内面中央に溝状のナゲ、凹み	反
9	16	碗	半完形	14.9	6	7.8	I 3	2-①	2.5	0.21	1	不明	無	不良	底部系切り痕	反
9	17	碗	底部	-	-	8.1	J 4	3	-	-	1	有	無	良好	腰部にヘラ削り痕	完
9	18	碗	底部	-	-	9.2	I 4	3	-	-	1	無	有	良好	腰部にヘラ削り痕	完
9	19	碗	底部	-	-	7.3	J 2	1	-	-	1	不明	無	やや不良	底部系切り痕	反
10	20	小碗	半完形	10.7	4.4	6	J 4	1, 2-②	1.2	0.10	1	無	有	やや不良	底部系切り痕(ナデ消し)	反
10	21	小碗	底部	-	-	6.7	L 4	1	-	-	1	無	有	良好	底部系切り痕(ナデ消し)	完
10	22	小碗	半完形	11.2	3.6	6.6	I 3	2-①	4.7	0.39	1	無	有	良好	底部外面粗鉛底	反
10	23	小碗	底部	-	-	6	J 3	1	-	-	1	有	無	良好	底部系切り痕	反
10	24	段皿	半完形	13	1.5	7.5	I 4	1	3.8	0.32	1	有	無	良好		反
10	25	段皿	半完形	12.4	1.8	7.2	J 4	1	3.6	0.30	1	無	有	良好		反
10	26	段皿	半完形	12.8	2.2	7.2	J 3-J 4	1	2.3	0.19	1	有	無	良好		反
10	27	段皿	半完形	13	2.3	7	J 3-J 4	1	3.9	0.33	1	有	無	良好		反
10	28	段皿	半完形	12.8	2.2	7.6	I 3	2-①	3.4	0.28	1	有	無	良好		反
10	29	段皿	半完形	12.7	2.4	7	I 4	2-②	0.7	0.06	0	不明	無	不良	底部系切り痕	反
10	30	段皿	半完形	12.5	2.4	6.1	I 3	1	1.2	0.1	1	無	有	良好	底部系切り痕	反
10	31	段皿	半完形	12.6	2.5	6.6	J 2	1	0.3	0.03	1	有	無	やや不良	底部系切り痕、草茎痕	反
10	32	段皿	半完形	12	2.5	6.3	J 3-K 3	1	6.3	0.53	1	有	無	不良	底部系切り痕	完
10	33	段皿	半完形	12.8	2.3	7.4	J 3-J 4	1	1.2	0.10	1	不明	無	良好		反
10	34	段皿	半完形	13.4	2.6	7.4	J 3	2-①	0.5	0.04	1	有	無	良好	底部系切り痕、蝶殻痕	反
10	35	段皿	半完形	13.6	1.8	7.4	I 4	1	4.6	0.38	1	無	有	良好		反
10	36	段皿	半完形	13.8	2	7.9	I 4	1	2.5	0.21	0	有	無	やや不良		反
10	37	段皿	半完形	12.9	1.8	7.8	I 3	2-①	7.1	0.59	1	有	無	良好	底部系切り痕、底部内面凹み	完
10	38	段皿	半完形	13.6	1.9	8.2	J 4	1	2.5	0.21	1	有	無	良好	底部内面凹み	反
10	39	段皿	半完形	13.8	2.1	8	I 3	2-①	3.9	0.33	1	無	有	良好	底部内面凹み	反
10	40	段皿	半完形	13.8	2.1	7.6	I 3	2-①	3.6	0.30	1	有	無	やや不良	底部内面凹み	反

第3表 遺物観察表(2)

博物 番号	遺 物 番 号	器 種	残 存 部 位	法量		出土位置	出土層位	口縁 残 存	口縁 残 率	底部 残 存	重ね 焼き 痕	内面 自然角	焼 成	備 考	実 測	
				口径	器高 底径											
10	41	段皿	半完形	13	2	7.2	J 3 - J 4	1	4	0.33	1	有	無	良好		反
10	42	段皿	半完形	14.8	2.5	8.4	I 3	1	3.1	0.26	1	有	無	良好		反
10	43	段皿	半完形	14.2	2.6	7	J 4	2 - ②	2.6	0.22	0	有	無	やや不良		反
10	44	段皿	半完形	13.2	3	6.7	J 3 - J 4	2 - ①	4.5	0.38	1	有	無	良好	底部未切り底、内面に不定方向のナデ	反
10	45	段皿	半完形	13.3	2.6	6.8	I 3	2 - ①	3.9	0.33	1	不明	無	やや不良	底部未切り底	反
10	46	段皿	半完形	14	2.7	7.8	I 3	1, 2 - ②, 3	5.5	0.46	1	有	無	やや不良	底部内部凹み	完
10	47	段皿	半完形	15.2	3.1	7.9	I 3	1	3.1	0.26	1	有	無	良好		反
10	48	段皿	半完形	13.8	3.4	7.2	J 3 - J 4	1	1.2	0.10	1	有	無	やや不良		反
10	49	段皿	半完形	13.7	3	6.6	I 3	1	0.5	0.04	1	有	無	やや不良	底部未切り底	反
11	50	丸皿	半完形	12.2	2.2	6.6	J 4	1	0.9	0.08	1	有	無	良好	底部未切り底	反
11	51	丸皿	半完形	12.6	2.1	7.4	I 3	1	5.75	0.48	1	不明	無	不良	底部内部凹み・沈線、底部外縁未切り底	完
11	52	丸皿	半完形	12.4	2.2	7.2	I 4 - J 4	3	2	0.17	1	不明	無	良好	底部内部凹み	反
11	53	丸皿	半完形	12.8	2.4	7.5	J 3 - J 4	1	1.2	0.10	0	有	無	良好		反
11	54	丸皿	半完形	12.8	2.4	7.4	J 4 - K 4	1	1.5	0.13	0	有	無	良好	底部内部凹み・沈線	反
11	55	丸皿	半完形	12.2	2.5	7	I 3, K 4	1	0.9	0.08	1	有	無	良好		反
11	56	丸皿	半完形	12	2.5	6.4	J 3 - J 4	1	0.5	0.04	1	不明	無	不良	底部未切り底	反
11	57	丸皿	半完形	12.3	2.6	6.8	I 4	2 - ②	2.5	0.21	1	有	無	良好		反
11	58	丸皿	半完形	12.8	3	6.6	I 4	3	4.6	0.38	1	有	無	不良	底部未切り底	反
11	59	丸皿	半完形	12	2.8	6.8	I 4	2 - ①, 3	6.1	0.51	1	無	無	不良	底部未切り底	完
11	60	丸皿	半完形	12.8	2.7	8.2	K 2 - L 3	2 - ②	2.75	0.23	1	有	無	良好	底部未切り底	反
11	61	丸皿	半完形	11.8	2.4	6.8	K 2 - L 3	2 - ②	0.9	0.08	1	有	無	良好	底部内部中央溝状のナデ	反
11	62	丸皿	半完形	12.4	2.6	7	J 3	1	1.5	0.13	0	有	無	良好		反
11	63	丸皿	半完形	12.8	2.7	7.7	J 4	2 - ②	0.5	0.04	1	有	無	やや不良	底部未切り底	反
11	64	丸皿?	半完形	12.6	3.3	7	I 3	1	2.2	0.18	1	不明	無	やや不良	底部未切り底、高台様痕	反
11	65	瓶類	口縁部	-	-	-	J 4	1	1	0.08	0	-	-	良好		断
11	66	瓶類	口縁部	-	-	-	I 3	1	1.3	0.11	0	-	-	良好		断
11	67	短頸蓋?	口縁部	-	-	-	I 3	1	-	-	0	-	-	良好		断
11	68	手付瓶	把手	-	-	-	J 4	1	-	-	0	-	-	良好		断
11	69	瓶類	胴部	-	-	-	I 3	1	-	-	0	-	-	良好	輪模み成形、外表面削り調整後ナダ消し	反
11	70	瓶類	胴部	-	-	-	J 4	2 - ②	-	-	0	-	-	不良	輪模み成形、内外面削り調整、無地	反
11	71	瓶類	胴部	-	-	-	I 3	2 - ①	-	-	0	-	-	良好	輪模み成形、外表面削り調整後ナダ消し	反
11	72	瓶類	底部	-	-	15.4	J 4	2 - ②	-	-	0	-	-	やや不良	外表面削り調整	反
11	73	瓶類	底部	-	-	8.4	J 3	1	-	-	1	-	-	良好	須恵器質、外表面削り調整	反
11	74	高环?	等底部?	-	-	-	K 4	1	-	-	1	不明	無	不良		反
11	75	土師器甕	口縁部	-	-	-	I 3	1	1.6	0.13	0	-	-	良好	陶質、径1~5mmの砂粒多(石英多)	断
11	76	土師器甕	口縁部	-	-	-	I 4 - J 4	2 - ①	0.7	0.06	0	-	-	良好	陶質、径2~3mmの砂粒多(石英・金星母)	断
11	77	土師器甕	口縁部	16.4	-	-	I 3	2 - ①	3.3	0.28	0	-	-	良好	陶質、径1~5mmの砂粒多(石英多)	反

実…実測法の種類を示す。法量の数値はこの実測時の数値による。

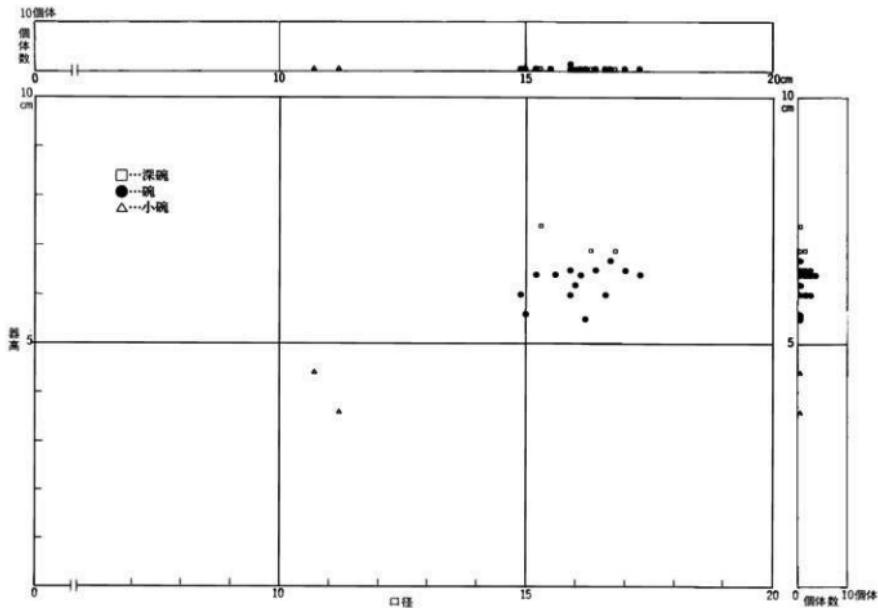
完…完形品実測 反…反転実測 断…断面実測

第4章 まとめ

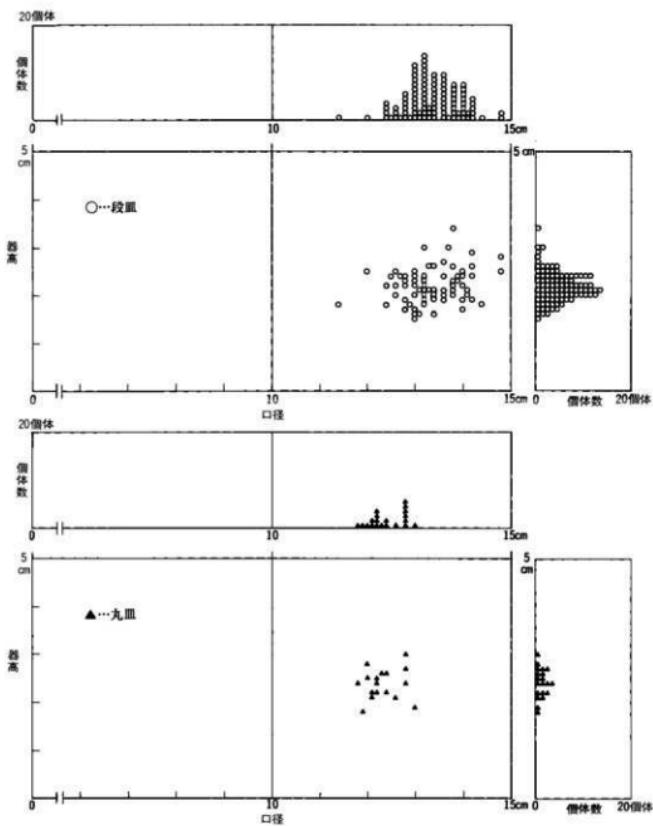
今回出土した遺物の大半は、1・2層といった後世に堆積した層からの出土である。そのため、層位や出土位置からの検討は困難であり今回は行わなかった。ここでは出土遺物の全体の様相を属性ごとに傾向を捉え、土岐口西山古窯跡の様相の一端を伺うにとどめた。

器種構成では、先述のとおり碗類が3類、皿類が2類、瓶類・壺類に分類できる。折縁皿・輪花碗・輪花皿・托・耳皿・鉢などは皆無であり、やや偏りがみられる。しかしこれらの器種が生産されていなかったのか出土しなかったのかは不明である。今回最も多く出土しているのは段皿である。次いで碗が多いが、深碗・小碗の数を足しても段皿の個体数にはおよばず、碗と段皿のセット関係⁹⁾から考えても実際の構成比がこのようになるかには疑問が残る。丸皿は、段皿と比べかなり少ない。虎渓山1号窯式期から丸石2号窯式期にかけて深碗の増加に伴い、段皿が増加することが知られており⁹⁾、時期的な様相を示すものと思われる。

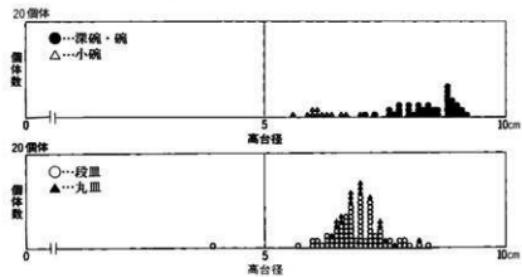
碗の形態は、白土原14号窯のA・B類の分類¹⁰⁾にしたがえば、図示した個体の内ほとんどがB類に属



第12図 碗類の法量散布図



第13図 血類の法量散布図



第14図 碗皿類の高台径

し、A類に分類できるものは22・23の小碗のみである。法量の大きいA類については今回検出できなかった。B類は当古窯跡の分類によって3種に分けたが、この内深椀と碗の明確な分離は困難であり、法量上の差異がほとんど無い。白瓷の碗には、白瓷系陶器に直接連続する2種の碗があることは研究者の一致を見ているが、この二つの碗、深碗といわゆる碗Bの概念規定そのものに問題を残している¹⁰⁾。今回は形態などの若干の差異によって深碗を抽出したが、やはり曖昧な分類になってしまったことは否めない。今後の課題としたい。

皿類については、丸皿の規格性の高さに対し、段皿の法量散布には幅がみられる。先に述べた碗B類とのセット関係による多様化と考えられるが、第III章で述べた段皿の形態については使用目的の違いか時期差かの判断はできない。

成形は瓶類・壺類を除き、ロクロ水挽き成形で行われる。底部に糸切り痕を残すものは全体の約33%（底部側体数）みられ、その多くは高台貼り付け時に高台の内周のみをナデ消している。その他はヘラケズリ調整後、底部外面中央を残してナデ消しているものが多い。他に底部外面に櫛殻痕を残すものが3点みられる。いずれも高台が低い器種であり、高台接合時のナデ調整痕の上に付く。このことは成形の後、乾燥が不十分な段階で櫛殻の上に載せられた可能性が高い。ただし高台自体にはあまり櫛殻痕がみられない。灰釉は口縁部内外面に漬け掛けで施されるが、瓶類・壺類については施釉方法は判断できなかった。

以上土岐口西山古窯跡出土の灰釉陶器について述べてきたが、碗の高台が断面三角形のものが少なく、段皿の法量や碗の高台径が大きいものが多いことから、虎渓山1号窯式¹²⁾に比定される。ただし器種構成比や碗の器種分化などに問題があり、資料不足は否めない。今後発掘が行われた際に再検討する必要があると思われる。

今回、遺構はほとんど検出することができず、古窯跡全体の様相を解明するには至らなかった。しかし灰原の検出やA区の成果から位置を推定することができ、今後発掘調査が行われる際の一助になると考える。また現在周辺から古窯跡が発見されておらず、なぜ単独でこの地に構築されたのかという疑問や妻木川を挟んで東側にある溢門古窯跡¹³⁾との関係など検討すべき課題がある。今後の発掘による資料の増加を待ちたい。

注

- 3) 岐阜県教育委員会 1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 4) 土岐津町誌編纂委員会 1997『土岐津町誌 上』の中で、旧『土岐津町』誌においてこの名称が用いられていたことが記載されている。
- 5) 桥崎彰一他 1976『美濃の古陶』 光琳社
- 6) 注3の文献と同じ。
- 7) 注4の文献と同じ。
- 8) このことは、齋藤孝正 1983『正家1号窯発掘調査報告書』や注1前川文献によって指摘されている。深碗の高台形が段皿の段内径にはほぼ一致することなどから、段皿が深碗の托として機能していたことを示す。
- 9) 山内伸浩 1994『結語』『白土原14号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- 10) 注9山内文献、A類は口径に比して器高が低い浅めの碗、B類は口径に比して器高が高い深めの碗をさす。同文献では虎渓山1号窯式・丸石2号窯式期において碗の法量によってB類が3つ、A類が2つに器種分化することが示されている。本古窯では、法量散布の上でB類に相当する2種（深碗・碗と小碗）、A類に相当する1種（小碗）を確認した。なお山内氏は、口径16cm内外のB類碗をすべて深碗として扱っている。
- 11) 山下峰司 1995『灰釉陶器・山茶碗』『概説 中世の土器・陶器』中世土器研究会 真陽社。東濃窯・猿投窯において深碗と碗Bの概念規定が一致を見ないことが問題としてあげられている。特に東濃窯では、H72号窯式併行期の深碗と碗B（注1前川文献等）の形態が近似し、分離する事が極めて困難で見解の一貫を見ていなことが指摘されている。本報告書の碗の分類は、近年の多治見市における虎渓山1号窯式期の窯跡の分類を参考にしており、法量を主な基準としている。
- 12) 福年・年代観については、齋藤孝正 1989『灰釉陶器生産の一様相』『美濃の古陶』3、注9山内文献などを参考にしている。なお虎渓山1号窯式は、猿投窯年の東山72号窯式期の前半段階、10世紀後半に位置付けられている。
- 13) 滋門1号古窯跡の遺物については、注4文献に記述が見られる。遺物を実見することはできなかったが、実測図から判断するとほぼ同時期のものと思われる。

参考文献

- 齋藤孝正 1996 「施釉系土器」『日本土器事典』雄山閣
- 齋藤孝正 1996 「美濃の灰釉陶器」『日本土器事典』雄山閣
- 瀬戸市教育委員会 1992 「上之山一愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群広久手古窯跡群発掘調査報告書一」
- 多治見市教育委員会 1990 『明和古窯跡群発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1991 『明和32・33・38号窯発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1996 『大原5号窯発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1997 『明和40・41号窯発掘調査報告書』

図 版

図版1



B区調査前状況（北東から）



A区調査前状況（西から）



作業風景



灰原検出状況(1)（南西から）



灰原検出状況(2)（南東から）

図版2



遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)



発掘状況（右上北）



P 1 層位（南東から）



P 1 発掘状況（南東から）

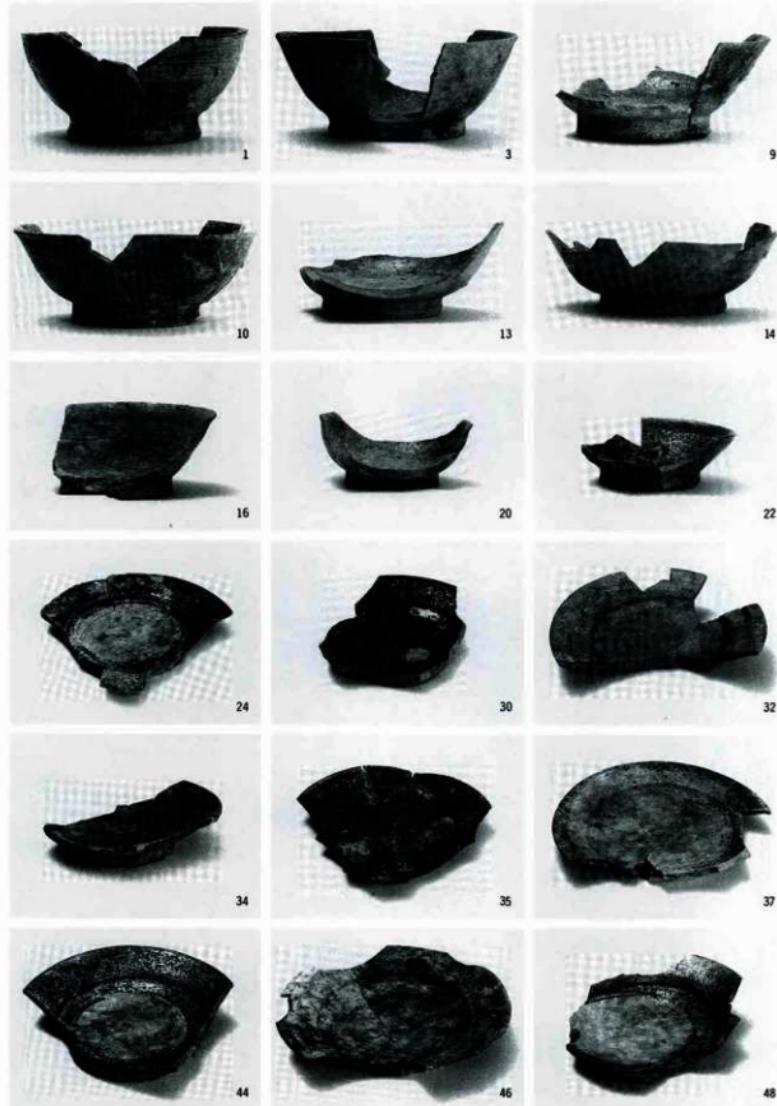


B 区発掘状況（北東から）

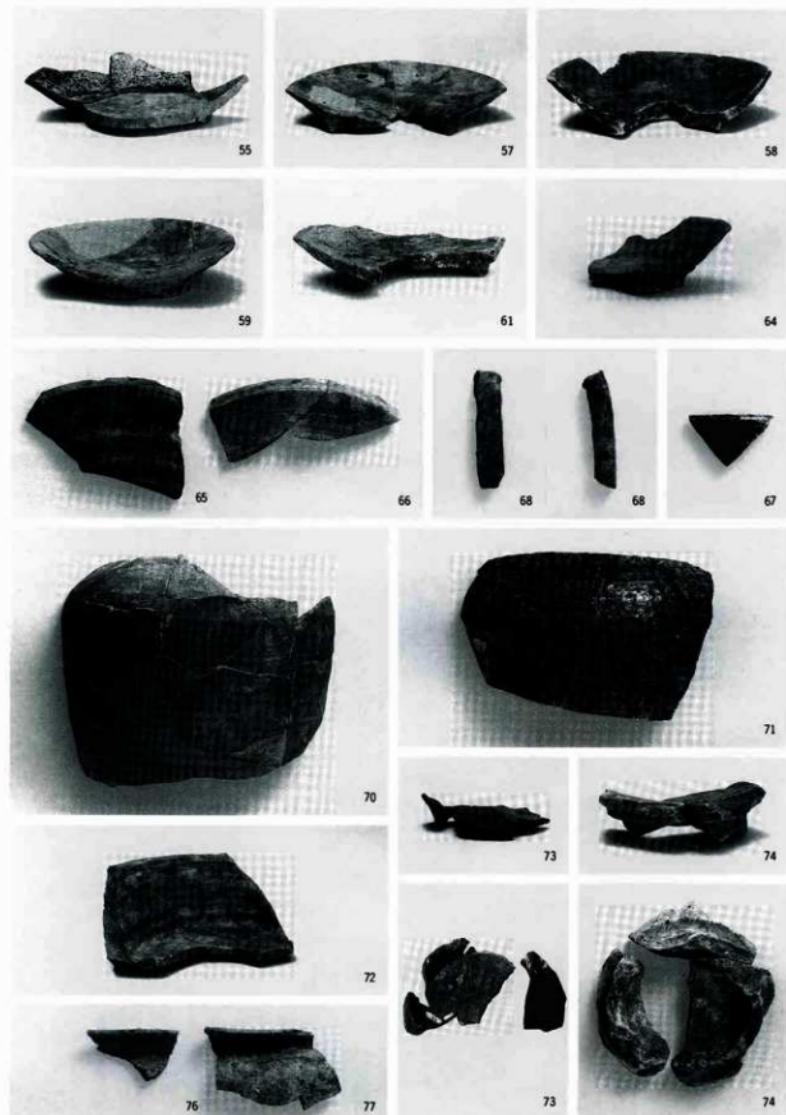


A 区発掘状況（東から）

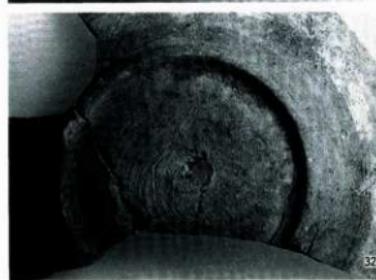
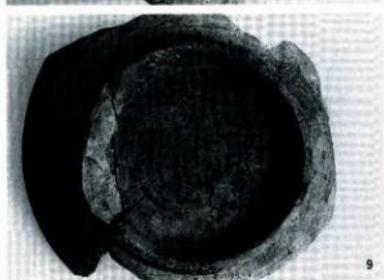
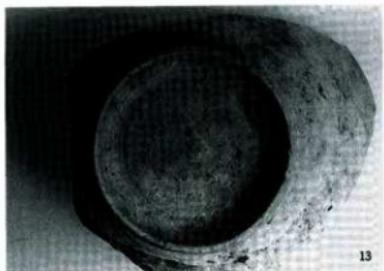
図版 3



图版 4



図版5 高台と底部外面調整(1)



13・48：ヘラケズリナデ調整

16・30・32：糸切り無調整

図版6 高台と底部外面調整(2)



37・58・59・61：糸切り無調整 31：糸切り痕、草茎痕

34：糸切り痕、粗粒痕 22：粗粒痕 35：線刻

報告書抄録

ふりがな	ときぐにしやまこようあと							
書名	土岐口西山古窯跡							
副書名	土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	長谷川幸志							
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel058(237)8550							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
と き ぐにしやま 土岐口西山 こ ようあと 古窯跡	岐阜県土岐市 と き けん と き し 土岐津郷土岐 と き つ く う と き 古窯跡の里 こ ようあと の さと 口字西山	21212	05314	35° 20' 15"	135° 10' 17"	19980615 ↓ 19980804	500m ²	土岐プラズマ・リ サーチパーク第一 土地区画整理事業 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
土岐口西山 古窯跡	古窯跡	古代	灰原 ピット?	白瓷(10世紀後半)		縁地帯として保存 される部分に古窯 跡が所在している ことを確認した。		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第50集

土岐口西山古窯跡

土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画
整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年3月31日

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社